琵琶歌

於賓中有瑜

上海

258
641

特47
953

櫻井驛……一頁
廣瀬中佐……七頁
威海衛……一七頁

……(櫻井驛)……

正訂琵琶歌 上卷ノ二

光鯱會
松原雲月編

櫻井驛

地 世はうき雲のゆきかひて
中千甲 またもやくもる五月やみ
地地 山ほとゝぎす血になきて
地 たてし策さへいれられず
地 武運につきし身はとまれ
切 嗚呼我が君をいかにせん

明治
47 7 7
交内

大干甲　我若し死すときまさば
乙　黒木の御所の板びさし
干　北山風の射る矢をば
干切　防ぎかねつゝ世をわびて

地　御衣の袖も五月雨の
地地　衰れいかにやなげかれん
地　聞けよ正行さすがにも
地　獅子は我子を産みて後
地　やかて高嶺の巖より
地　雲千仞の溪ぞこに

地　突き落してぞ氣を試す
中干乙　なさけのなきが情けぞや
地　況んや汝今すでに
地地　年は十歳にあまりあり
地　父が今はのひと言の
地　耳にとまらば若竹や
地　まだうらわかき身ながらも
中干乙　教のふしにたがふなよ

大干甲　さて此度の一戰に
乙　天下の安危さだまれり

干　汝が顔をみんことも
干切　これをかぎりと思ふなり

地地　正成死せは忽に
地　代は尊氏にきすならん
地　露の命をいと惜み
地　ために多年の忠も義も
地地　うち忘れつつ逆賊の
地　軍下に降るゝとあらば
地　我れ父ならず汝等は
地變　我が子にあらず臣ならず

地　若し一族の一人だに
地　生き殘りてぞあらんには

大干甲　金剛山の城枕
乙　ひき籠りつつ戰へよ
干　これ第一の忠なるぞ
干切　是れ第一の孝なるぞ

地地　香は千秋の末かけて
地　香ふためしと菊水の
地　形見の刀西東

地　あと見かへりて別れゆく
地　其の中空の五月雨に
地　なく聲高しほととぎす
止切　なく聲高しほととぎす

楠正成

櫻井驛ハ攝津國三島郡嶋本村ノ中ニアリ延元元年五月足利尊氏更ニ大擧シテ東上ス正成奏スルニ敵ヲ京都ニ入レテ討ツノ可ナルヲ以セシガ議納ラレズ乃チ櫻井ノ驛ニ至リ官ヲ賜ヒシ寶刀ヲ其子正行(時ニ年十一)ニ與ヘテ河内ニ還ラシメ湊川ニ陣シテ敵ノ陸軍ニ當リ縱横奮戰身ニ十一創ヲ被リ退イテ民屋ニ入リ弟正季ト相刺シテ死ス(一九九六)(延元元年五月)

楠正行

(一九八六嘉暦元年)(二〇〇八正平三年)

忠臣正成ノ子父ノ遺誡ヲ奉ゼンヲ念フ後醍醐天皇花山院ヨリ逃レテ穴生ニ行幸セラルヽヤ和田正朝等ト赴キ駕ヲ護リテ吉野ニ入ル後村上天皇即位ノ初メ兵ヲ住吉ニ出シテ桃戰シ細川顯氏ヲ破リ山名氏ヲ走ラス(正平二年、二〇〇六)尊氏是ヲ憂ヘ高師直、師泰ヲシテ兵六萬ヲ率イテ來リ攻メシム正行即チ弟正時和田賢秀等百四十人ト共ニ誓フニ死ヲ以テシ行宮ニ詣リ龍顏ヲ拜シ進ンテ四條畷ニ到リ奮戰三十餘合兵殆ンド盡キ終ニ正時ト相刺シテ死ス(時ニ正平三年正月七度も

(二) 廣瀨中佐

地　生キかへりつつ夷をぞ
地地　拂はん心我れ忘れめや
中干甲　最後の歌を小塚原
地　空敷忠義の鬼となりし
地　松蔭神靈の今茲に
切　又もあれます軍神

大干甲　いさめぬ時はきさらぎの
乙　空さりげなく春の雪
干　降る宜戰の大詔り
干切　征露の事の起りしより

地地　武士のとり傳へたる梓弓
地　射るか彌生の花と散り
地　霞と消ゑし大丈夫の
地　多きが中に朝日子の
中干甲　廣瀬中佐の打死は
地　傳へ聞くだに涙なり
地ノ一　比は三月二十七日
地ノ二　港口閉鎖の任務を帶び
地ノ三　福井丸に打乘りて
地　向ふはいつこ旅順口

地　百の雷矢叫の
地　玉のあられと降る中を
地變　おめずたくせず決死隊
　　玉の緒の絶ゆるもやまじ敷島の
　　大和たの子の務めつくまで
地　と詠みたる歌はまのあたり
地地　捨つる此の身の屍を
地　かざる錦と覺悟して
地　志ざしたる港口に
大干甲　我と我が船打沈め

乙　任務は終へぬいざさらば
干　ボート卸ろせの命令に
干切　兵士ひとしく乘りうつる
地　中佐も乘んとしたりしが
地　見れば一人不足なり
地　兵士一人の玉の緒も
地　國の寶とかねてより
地　部下をいたわる仁愛の
地　情の聲をふりしぼり

吟替地 杉野兵曹長はあらざるか
地 呼べど答はなかりけり
干 杉野兵曹長はあらざるか
干 再び呼べど答なし
地 杉野兵曹長はあらざるか
干 呼ぶ事三度に及べども
干 答ふるものは荒涙の
地 早もデッキをかくすまで
地地 船は次第に沈み行く
地 是迄なりと飛びうつる

地 刹那に敵彈飛び來り
大干甲 中佐の頭上に破れつして
乙 嗚呼廣瀬武夫
干切 六尺の體僅か一片の肉塊を殘し
地 落花みぢんとなりにけり
地遞 落花みぢんとなりにける

一世義烈赤穂里
三代忠義楠子門
憂憤投身薩摩灘
慷慨就刑小塚原

地地　君が作りし唐歌の
地　正氣の歌の一節は
地　古人にはぢぬ眞心を
止前切　其儘茲に軍神
地　花は櫻木武士の
中干甲　後の鏡となる神の
地　音もとどろに殘るらん
止切　音もとどろに殘るらん

廣瀨中佐

明治三十七年二月七日宣戰ノ詔勅下リ露國トノ協商斷絶スルヤ我聯合艦隊司令長官東鄕平八郎其本隊ヲ率ヰテ旅順ニ進ミ敵ノ機

先ヲ制シテ膽ヲ奪ヒ支那海ニ於ケル海上權ヲ掌握ス爾來數次旅順港內の水陸ヲ威赫砲擊シ陸兵ノ輸送ヲ安全ナラシメントシ二月二十三日廣瀨中佐ノ乘組メル報國丸ハ仁川丸ト共ニ港口ヲ閉塞シ目的ノ一分ヲ達シタリ

「丹心報國一死何辭
與船瘞骨旅順ノ陲

右報國丸ヲ指揮シ旅順口閉塞ノ途ニ上ラントスル時

廣瀨武夫

サレド我軍閉塞ノ功ヲ完フセザルヲ恨事トシテ更ニ第二回ヲ決行スルヤ中佐ハ又閉塞船福井丸ニ長タリ

「七生報國一死心堅
再期成効含笑上船

右福井丸ヲ指揮シテ再ビ旅順ニ向ハントスルトキ三月十九日

廣瀨武夫

四隻ノ決死船ハ暗キニ乘シテ枚ヲ銜ミテ港口ニ近キヌ探海燈ハ海面ヲ照射シ彈丸ハ浴ビルガ如シ艦船一齊ニ目的地ニ突進セシ時其時敵ノ擊出セル魚形水雷ハ電光ノ如ク來リテ福井丸ノ胴中セメテ命中スルヨト見エシ爆發ノ響天地ニ振ヒ海水忽チ旋渦ヲ生ジ凄サ云ハン方ナシ此時福井丸乘組員ノ一人杉野兵曹ハ其影ヲ示サザリキ既ニ端艇ニ入リタル中佐ハ捜索ニト福井丸ニ歸リ上甲板ニ杉野ヲ尋ヌルモ兵曹ハ見當ラズ歸リテ艇中ヲ改メシカ杉野ハ在ザルナリ中佐ハ復福井丸ニ躍リ上リヌ船ハ既ニ甲板ニ波ヲ逆バシラセヌ彼ハ雨下セル彈丸ノ下ヲ潛リツヽ

杉野ヲ呼ビヌ依然トシテ答無シ福井丸ハ既ニ甲板ノ半ヲ沒シヌ中佐ハマタ船中ニ入リヌ福井丸ハ最早數秒ノ壽命ヲ止ムル計ナリ遂ニ彼ハ艇中ニ歸リヌ舵手ハ艦ヲ轉シヌ一同ハ死地ヲ脫シテ生地ニ着クベク働ケリ呼吸巨彈ハ船ヲ擊ヒヌ廣瀨ハ微塵トナリテ其肉片ノ一塊ヲ留メ黃海ハ彼ノ墓所トナリヌ命ヲ捨テヽ部下ヲ愛シ獻身ノ擧動ヲ演ゼシ武夫廣瀨中佐

(三) 威海衛

地 名も高きぼつ海灣の咽喉なる

中千甲 威海衛の戰は

地地 我が聯合艦隊司令長官

地 伊東中將の手足の如く卒ます

地 水雷艇の功勳は
切 聞くもなかなか勇ましや
大干中 敵の艦隊勇々敢も
乙 威海衛の要害に
干止 防材堅く布設して
干 灣内深く潜みつつ
干切 戰ふ儀も見へざれば
地地 我が聯合の艦隊は
地 朝の雨雲に身を浴し

地 夕の風に櫛り
地 只遠近を取り卷きて
地 空敷時日を過せしが
地地 我が陸軍は日嶋と
中干乙 劉公島とを除く外
地 敵の砲台悉く攻取たりとの
地 信號の旗を見て
地 伊東司令長官は
地 急に水雷艇の司令を召し
中干乙 水雷攻擊を命ずれば
地 藤田少佐今井大尉の各司令

地壁　姿勢を正して申す樣
重地　そは我々の望む處
地　去ど又か
地　僅か防材の切目をめざし
地地　暗礁多き海なれば
地　誓て功は奏せむものの
地　水雷艇は悉く
中干乙　再び此處へ歸るまじ
地　さらばと斗り立あがり
地　忠誠面にあらわれしを
地　司令長官もそぞろに感じ

地水　落す涙も國の爲め
地變　思ひ切てぞ別れける
地　夜も早更けて月影は
地ノ一　威海衛の山に隱れ
地ノ二　白黑も分かぬ眞の暗
地ノ三　敵兵夢を結ぶ頃

崩地　我が艇隊は第六號艇を先鋒として」
干　百尺崖のこなたより
　涙をけつてぞ進み入る」
干　其勢は矢の如く港灣内に突き入れば

斥候の敵艦之れを知り

千　信號の光りきらめくや

灣内急に騷ぎ立ち

千　打出す迷射の砲丸は

雨かあられと降る中を物ともせず」

千　我が艇隊は忠義に身をや捨小舟

縱横無盡に馳せ廻る

地　第九號艇はすばやくも

千　巨艦間近に進み寄り

魚形水雷を發すれば

水煙一度にドット起き」

地　命中の音天地もさけん斗にて」

大千甲　艦隊中ば沈みけり

乙　其の翌けの夜も此處や彼處に

千　水雷の音物すごし

地地　斯く堅城鐵壁と賴みたる

地　旗艦定遠をはじめとし

地　來遠威遠も沈められ

地　戰闘力もつきぬれば

地　丁提督思ふ樣

地變 かくなる上は是非もなし
地 兵士斗りは助けんと
地 比は明治の廿八
地 二月十二日の朝風に
地 靡くや力なくなくも
地 白旗立てて降伏の
中干乙 使節の船ぞ見にける
地 武士は物の衰れを知るとかや
地 伊東司令長官は丁提督の請をいれ
地 聊か心なぐさめんと
地變 送りものをぞつかはざる

地重 丁提督は悄然として
地 我が事已に終りぬと心靜かに自害して
地地 武士の道をぞ守りける
吟替地 嗚呼昨日迄も今日迄も
干 清國にそうそうたる
干 北洋艦隊の司令長官
地 丁汝昌とも仰がれし身の
干 斯くなりつるは敵ながら
干 又と得がたき英雄の
地 末路の程も是非なけれ

地地 茲に威海衛を占領し
地 砲聲全く治まれば
地 風雲忽ち一變し
地 威海の淵にうづまきし
地 鎮遠號を始めとし
地地 濟遠平遠廣丙號
地ノ三 其外砲艦數十艘
地 檣頭高く雨を呼び
地 雲を起せし黄龍も
止前切 大和劍に角を斷ち

地 忽ち旗は日の丸の
中千甲 輝き渡る軍艦旗
地 君が威稜は天が下
地 仰がぬ者こそなかりけり
地 仰がぬ者こそなかりけり

威海衛

明治廿七年七月(二十五日)日清ノ役起ル

仝廿八年二月迄ニ遼東半島全部ヲ占領ス威海衛ハ山東半島ニアル軍港ニシテ清國北洋艦隊ノ根據地、黄渤二海ヲ握スル要街ナリ清國防材ヲ施シ砲壘ヲ固メ防備極メテ嚴ナリ第二軍ノ旅順口ヲ占領スルヤ第二師團長陸軍中將佐久間佐馬太第六師團長陸軍中將黑木爲禎兵ヲ卒ヰテ榮城灣ニ上陸シマヅ摩

258
641

天嶺ノ險ヲ奪ヒ次デ海岸ノ諸砲台ヲ陷レ進デ威海衛ノ砲臺ニ入リヌ清兵退キテ劉公嶋ニ入リヌ或ハ遁レテ芝罘ニ走ルモアリキ我海軍亦陸軍ト力ヲ戮セテ敵ヲ挾擊セシニ敵艦劉公嶋ノ蔭ニ據リテ防戰甚ダ力メタリ我艦隊ハ夜ニ乘シテ水雷ヲ放チ敵ノ旗艦定遠ヲ破壞シ每夜水雷ヲ發射シ敵ヲ苦シム清軍定遠以下四艘ノ軍艦及ビ水雷艇ヲ失ヒ勢頓ニ衰ヘ水師提督丁汝昌遂ニ勝ベカラザルヲ知リ使ヲ遣シテ現在ノ船艦ト砲臺兵器ヲ我ニ納ルヲ約シ海陸軍內外ノ官吏兵勇人夫ノ生命ヲ助ケン事ヲ請ヒ我ハ之ヲ許シ吾が艦隊悉ク威海衛灣內ニ入リ敵艦鎭遠以下十艘ヲ押收シ悉ク砲臺兵器ヲ占領セリ(二月二日)而シテ丁汝昌ハ毒ヲ仰イデ自殺セリ

(附記)我聯合艦隊司令長官ハ伊東祐亨旗艦ヲ松島トス

明治四十一年七月一日印刷
明治四十一年七月三日發行

正價 金拾貳錢

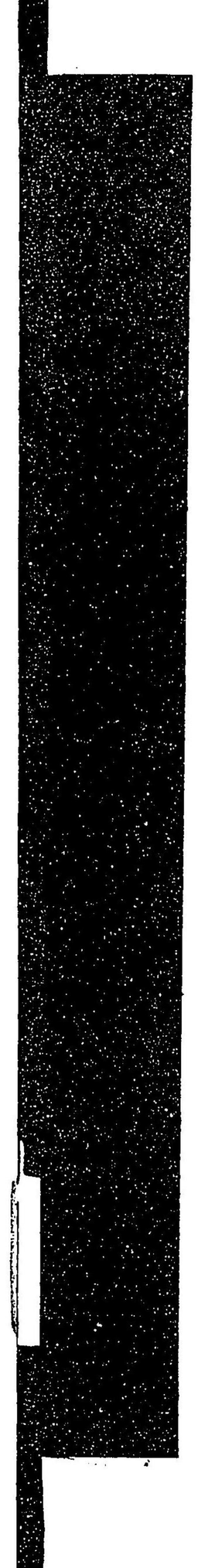
編者 名古屋市東區筒井町百四十三番戶 松原雲月

發行兼印刷者 名古屋市東區萱屋町貳丁目六十八番地 山田慶太郎

印刷所 仝市仝區仝町仝番地 山田活版印刷所

發行所 名古屋市東區筒井町情妙寺內 鯱光會

復製不許



琵琶歌

松原雲月

国立国会図書館

074716-000-0

特47-953

琵琶歌（訂正）上巻ノ2

松原　雲月／編

M41

CEJ-0306